

## 「エラスムス大学・ゲーテ大学・ハイデルベルク大学院生交流プログラム参加報告書」

京都大学大学院経済学研究科博士課程1年 加藤浩司

私は、この派遣プログラムに参加するまで海外にほとんど行ったことがなく、ましてや2週間近くも海外で過ごしたのは初めての経験だった。今回の派遣プログラムでの経験は、今後私が博士論文を執筆していく上でも非常に有意義なものになったと考えている。

まず、この派遣プログラムに参加して私が最も強く実感したことは、英語の重要性である。とりわけ、スピーキング力とリスニング力が重要であると感じた。というのも、英語を十分に話したり、聞いたりすることができないために、伝えたいことや質問したいことがあっても、相手に上手く伝わらなかったり、なんとか伝わったとしても、今度は相手の言うことがほとんど聞き取れなかったりと、何度も残念な思いをしたからだ。英語をもっと十分に話したり、聞いたりすることができていれば、もっと多くのことが学べたに違いない。こうした思いからこれまで以上に、英語は絶対にできなくてはならないと強く実感した。また、実際に海外の学生と交流する中で、彼らの方が日本の学生よりも現実の問題に対する関心が強いと感じた。決して海外の学生の方が日本の学生よりも優秀だとは思わなかったが、海外の学生のように現実の問題を意識しながら大学で勉強・研究するという姿勢は非常に重要だと思った。今後はいままで以上に、自分の研究と現実の問題との関連を意識しながら研究を進めていきたいと考えている。

実際に2週間近く海外で過ごした中で、私にとって最も印象的だったのは、ドイツで見たたくさんのホームレスである。ドイツにはそのほとんどが移民と思われるたくさんのホームレスがいた。現在のドイツ経済は、ヨーロッパ諸国の中で最も良好な状態にあるといわれているが、その一方でたくさんのホームレスがいたことが非常に印象的だった。ドイツでは移民や貧困層に対する福祉システムが十分に機能していないと感じた。

今回の派遣プログラムの内容は、今後、博士論文を執筆していく上でも非常に有意義なものになったと考えている。ドイツにある世界最大の労働組合、IGメタルにインタビューできたからである。このプログラムに参加しなければ、このような機会はなかつただろう。実際にIGメタルのエコノミストから、現在ドイツの労働組合が抱えている問題や、賃金決定のプロセスとその理論的背景などについて話を聞いたり、質問したりすることができた。現在ドイツの労働組合が抱えている問題についていえば、ドイツの労働組合は、今非常に大きな制度的転換期にあるという。具体的には、労使間の団体交渉に政府の介入を認めるのかどうかという問題や、現在ドイツでは組合員資格のない派遣労働者が増加しており、そのことが労働組合組織率の低下をもたらし、組合交渉力の低下につながっているといった問題があり、そのために大幅な制度改革が必要であるという。また、賃金決定のプロセスとその理論的背景について質問したが、私はIGメタルの賃金決定の考え方には、共感する部分も多くあったが、あまり確実な合理的基礎がないと感じた。IGメタルのエコノミストによれば、賃金決定の最も重要な要因は、労働組合の交渉力である。私もその考えには全く同意する。しかし、IGメタルのエコノミストが、強い組合交渉力にもとづいて、労働生産性上昇率を上回る実質賃金上昇が必要だという時、私はその考え方に同意しない。労働生産性と実質賃金は連動して同じ方向に動くべきであり、そのためには労働組合組織率を高め、労使間の交渉力を対等なものにしなければならないが、労働生産性上昇率を上回る実質賃金上昇は利潤圧縮を意味し、順調な資本蓄積を妨げる可能性があることから、そのような所得分配は長期的に見て労使双方にとって合理的なものとはいえないだろう。たしかに、所得分配は労使間の対立的な力関係、すなわち「政治」によって決定されるが、そこには何らかの合理的基礎がなければならないと強く感じた。こうして私は、「合理的価値」という概念に基づいて所得分配の合理的基礎を研究し、その成果を博士論文としてまとめていこうと考えている。

他にも、海外の大学で研究報告をしたり、海外の学生や研究者たちと意見交換をしたりすることができ、とても良い経験になった。今後はこのプログラムで実感したり、経験したりしたことを踏まえて、研究を進めていきたいと考えている。

私は、今回の派遣プログラムに参加するまで海外留学を考えたことはほとんどなかったが、今ではその意義を十分に理解している。今後、海外留学のチャンスがあれば積極的に挑戦したいと考えている。